

平成30年度 第3回徳島県文化創造審議会 議事録

I 日 時

平成31年2月1日（金）午後2時から午後3時50分まで

II 場 所

徳島県庁10階大会議室

III 出席者

【委 員】20名中11名出席

桐野豊会長、吉田和文副会長、阿部曜子委員、佐々木尊委員、鈴木アヤ子委員、板東久美委員、藤原奈穂委員、森恵子委員、山下徹委員、大和あゆみ委員、四十宮隆志委員

【徳島県】

板東安彦県民環境部長、森口浩徳県民環境部次長、吉成浩二県民文化課長、木野内敦教育委員会教育文化課長、喜羽宏明県民文化課あわ文化創造担当室長ほか

IV 次 第

1 開会

2 開会あいさつ

3 議事

（1）「徳島県文化芸術推進基本計画（仮称）」の策定について

（2）意見交換

（3）その他

4 閉会

V 議事の概要

（桐野会長）

それでは早速議事に入ります。

まず、前回第2回審議会では計画の骨子案について議論したところですが、当日ご欠席の委員の方々からのご意見をいただいたという事で、そうした意見等につきまして事務局から報告をお願いします。

（事務局）

前回10月26日に開催いたしました第2回審議会におきまして、計画の骨子案につきまして委員の皆様からご意見をいただいたところです。

当日、ご欠席の委員の方々を始め、ご出席されておられた委員の方々からも会議や資料を振り返られまして、気づいた点等を様々なご意見をいただきました。

そうしたご意見をどのように踏まえて、本日の資料の計画素案を取りまとめたかにつ

きましては、素案の説明と併せてご報告をさせていただきます。

私からは本日ご欠席の委員の方から頂いたご意見・ご提案につきまして、ご報告をさせていただきます。

A委員から、伝統文化においても、新しい感性を取り入れていくことが大切である。日本や海外から人々を誘引できるような個性的な魅力や、情報発信の大切さ、応援するサポーターの育成についてのご提案をいただきました。

B委員から、伝統芸能の担い手の育成を図っていくことについてのご提案をいただきました。

C委員から、新たな文化の創造も大切ではあるけれども、今ある文化を県全体で盛り上げ、次世代に継承することも大切だというようなご提案を頂いております。以上でございます。

本日ご出席の委員におかれましては、本日の資料の内容も踏まえ、意見交換の中で、ご意見・ご提案をいただければと存じます。どうかよろしく願いいたします。

(桐野会長)

それでは、「徳島県文化芸術推進基本計画（仮称）」の素案について議論していきたいと思います。事務局から説明をお願いします。

(事務局)

お手元にお配りしております、「徳島県文化芸術推進基本計画（素案）」につきましてご説明をいたします。概要版と冊子とがございますが、主に概要版でご説明させていただければと思っております。

1枚目の裏面に、策定の趣旨と書いております。これは、第1回目の審議会の時にもご説明があったかと思いますが、国において文化芸術基本法が改正され、文化芸術の振興、今まで主眼を置いてきた継承、発展、文化をどう守り育てていくかということに留まらず、観光やまちづくりなど幅広い分野に文化芸術を活用する、最近、文化庁の方で言っております、文化財を観光振興等にどんどん活用していこうという動き。あるいは文化の定義自身も、生活文化全般を捉まえて、例えば、民泊などの新しい流れがインバウンドの中で起こっているようなことも、どんどん文化芸術の中で積極的に活用を図っていこうと、そうした文化の有する様々な側面を捉まえて、振興を測っていこうというようなことに呼応しています。

徳島に息づく多様な文化をどのように盛り上げていくか、発展させていくかということについての基本的な方向性や目指すべき将来像、具体的な取り組み内容などを盛り込んだ基本計画を新たに策定したいと考えているものでございます。

計画の位置づけにつきましては、文化芸術基本法の中で、地域が定めるよう取り組む基本計画と定義されているものとして、また県の条例でも基本的な方針を定めることになっておりますので、それに位置づけるものとしております。国の計画の5年間の推進期間に合わせ、県でも策定次第平成31年度から35年度までの5年間を推進期間としたいと考えております。推進期間を定めるとともに、ちゃんと進んでいるかどうかの検証も必要だと考えておまして、それにつきましてはこの審議会の場を活用いたしまし

て、毎年検証をし、必要に応じての見直しを図っていくものと考えております。

次のページに、前回、骨子としてご説明したさせていただいたものを、整理させていただく形になりますが、文化を取り巻く課題をどう解決していくか、発展に導いていくか、ということについて5つポイントとして集約させていただきました。

「視点1」は、委員の皆様からも色々ご論議・ご発言をいただきましたが、県の文化力全般の向上を図っていくことが大事だろうということで、鑑賞や発表の機会等、そうした県民主役のあわ文化の推進というところが一つ目の視点になるであろうと。

次に、ここが裾野の拡大という部分であるとすれば、その担い手というか、あわ文化の発展に導くために、継承していく担い手が、若い人材を中心に必要ではないかということで、「視点2」として文化の担い手育成を入れております。この「視点1」と「視点2」が、文化の人づくりの部分ではないかと考えております。

「視点3」のところは、サポーターですとか応援する人というような話もありましたが、ここでは「徳島ファン」という新しい言葉を入れておまして、そういう徳島を応援していただく方を拡大していくと、人づくりから文化を使った地域づくりになっていくのではないかとということで、あわ文化が息づくまちづくりを推進するというようにしております。

次に、人づくり、地域づくりときて、さらにこの文化を経済効果、発展につなげていくというようなことで、好循環、文化と経済の好循環により商品を開発したり、観光誘客を積極的に進めていくことでの産業経済の活性化を「視点4」としております。

「視点5」につきましては、これまでの議論の中で一番ご発言が多かったかと思うんですが、やっぱり発信、特に文化についての発信力が弱い。徳島県全般の発信力が弱いというご指摘もいただいております、その発信の部分について、どう取り組んでいくかという発信強化を「視点5」にしております。

次のページに、このそれぞれの視点に基づく基本的な方向性というものを、前回も掲げさせていただいておりましたが、この点についてはいろいろご議論もいただきましたので、若干整理をさせていただきまして、県民主役のあわ文化の推進というところでは「未知なる舞台、みんなで築くあわ文化」とさせていただきました。

その次の人材育成のところは「未知になる開花、根付き育てる人材・才能」とさせていただきまして、その次のところ、この辺り、地域の中に人を呼び込むというような発想ですが、少し分かりにくいというお話もありましたので、この3番目につきましては、あくまで今ある文化、あるいは地域の世俗慣習も含めてですけれども、その地域づくりをどうしていくかというところに、先ほど述べましたような徳島ファンの力を借りて継承していく、保存していくというようなところは、地方創生のまちづくりの部分というのがここに位置付くのではないかと考えておまして、委員の皆様からも、例えば那賀校の高校生が地域に入って活動しているとか、小学生が地域の人と一緒に活動しているといった話もありました。そこにあるいは、成長して都会に出て行った人が戻ってくるとか、そういうような、今わりと県南部のお祭りの美波町の「ちょうさ」ですとかそういったところでそうした活動もされているわけですけれども、そういう活動を伸ばしていかないと、なかなか地域に文化と言うか、祭りと言うか、伝統と言うか、そういったものが残っていかないという、そこが県民の皆さんのプライドとかルーツについての土

壊となる場所ですので、そういったものを重要視していくというのが、この3本目の柱になっております。

4番目の柱は、これは皆様からいろいろとご意見もありまして、経済に使っていくんだと、元文化庁長官の河合隼雄さんの言葉も引用されてのご発言もあったところですが、色々なものをここに捕まえていく。文化、そこに観光だとかあるいは物を売っていくっていうそういうところも入れていくという好循環、そして、あるいはその融合とあえてしておりますのは、これも審議会の中で単なる音楽の発表会ではなくて、そこに新しい文化を入れる。それは例えば、映像やLEDとかでの新しいものもあるし、あるいは、人形浄瑠璃と音楽とか、そういう地域の文化伝統文化との融合みたいなものもあるのではないのかということで、未知なる融合と入れて、そこから新しいものを生み出していくというような要素も入れております。

一番下のところが先ほども言いましたが、発信という部分、多くの方にどう伝えるか、どこで何をやってるか分からないというような部分の発信もありますし、あるいは、県外の人に徳島のことが知られていないという発信もある。そういう、身近な発信から大きなところの発信まで含めて、国内外にどういうふうにあわ文化、徳島の文化を発信していくか、というようなことをここでは書いております。

それで、この未知なるとつけた部分につきまして、委員の方から、今までの伝統文化を守るというのではなくて、ややちょっと新しいものにも視点が依りかかっているのではないかなというようなご指摘も受けたのですが、この点につきましては、当然その5つの視点を上から順番に裾野を広げて、人作りをして、地域づくりしていくところが当然やっぱり重要なのであって、そういうところに力点をおいて、その基盤がしっかりしてこそその新しい文化づくり、新しい徳島作りだと思いますので、そのところは当然しっかりしていきたいということ。ただ、この点につきましては、人口がどんどん減っていく、高齢化が進んでいく中で、今までと同じようにしていたのではせっかくいいものが残っているのに、それが保存、継承できていかないんじゃないか、あるいは発展していかないんじゃないかということも捕まえて、どうやって守っていくかということに、未知なる手法、ツールとしての保存・継承の仕方というところに、やっぱり未知なる部分があるんじゃないかというようなことを考えているところです。

神山町ですずっと途絶えていた「棒突き」が国文祭を機に復活した。それも、いろんな地域の方が集まって力を合わせて復活したというような、そういう事例は、象徴的に語られるわけですが、そういう手法は、いろんなところで、未知なる手法を考えていかなければならないのかなというように考えております。

未知なるというフレーズにつきましては、少し見通せないというか、先が見えないというようなイメージもあって、なんとなく「どうなんだろう？」というようなこともあったところではございますが、一方でそのキャッチフレーズというか、皆がひとつになる道筋をつけていくという意味で、掲げる必要もあるのではないのかという意見もいただいております、「未知なる世界へ」少し語呂合わせも入れているますが「道成るあわ文化」というフレーズをここで使わせていただきました。

それで、この「道」というのは、文化には当然道がありまして、茶道とか華道というようにいわゆる文化の道というものがあまして、これはずっと続けてきたという、あ

るいは繋がっていくというイメージの道ですけれども、当然新しい文化、今日ここで生まれる文化もこれから道になって繋がっていったって初めて文化になるのではないかと考えておまして、そういう新しい切り口、あるいはこれまでのものをどう生かしていくかという部分の道を作っていくというところを兼ねて、「未知なる世界へ！道成る「あわ文化」」というものを掲げさせていただければと考えております。

今掲げました5本の柱に基づきまして、もう少し具体的にどうやっていけばいいのかを掘り下げたものが次のページになっております。それぞれ裾野の拡大、人づくり、地域づくり、経済の発展、そして発信という部分で当然必要になってくる、鑑賞機会の充実ですとか文化活動の活性化それから文化団体をどう活性化していくか。街づくりの所では徳島ファンを拡大していく手法としての必要性、それから好循環のところでの文化資源をどう活用していくか、あるいは新たな文化をどう創造していくか。一番下で、やはり戦略的な情報発信とかあるいは、国際スポーツ大会も含めてグローバル化という部分を加速化していくというようなことも考えていく必要があるのではないのかと考えております。

それで、一番右には、さらにもう少し細かくどういう事を進めていくかということを書かせていただきました。上から、まず鑑賞機会の充実ということでは、特に子育て世帯とか文化に触れにくい、触れるのにやや少し参加しにくい世代もあつたりしますので、そういった皆さんにどういう風に鑑賞機会を提供していくかということを考えていく必要があること。それからさらに発表の場を作っていくことも当然ですし、障がい者ですとかあるいは、世代間交流というように3つ目のところには書いておりますが、これは高齢者の方からお子さん方から、文化を通じた交流があるのではないのかということを書いております。

次の「人材・才能」の3つの項目、顕彰は、県文化賞を始めとした各種顕彰をさらに活用していく必要があると考えております。そして、文化の創造にはアドバイザー的な方を県で派遣していくということも必要があるのではないのかと考えております。また若者の参加を促進していくために、やっぱりコンクールでの若手の優秀者を活用していく、発表機会をどのように設けていくかということもありますし、県文化振興財団の方からのご意見でもありましたが、芸術家を小学校、中学校なんかに派遣しておりますが、そのような優れた芸術家との交流が生まれる場面を作ることで、文化活動の若者参加を促進していく必要があると考えております。

また、街づくりのところにつきましては、「徳島ファン」という言葉を使っておりますが、今はこの地域に住んでいないけれども元々いたとか、縁があるとか、おじいちゃんの家がその地域ですよというような方をいかに取り込んでコミュニティを守っていくか、地域づくり、地域団体のところでのコミュニティ。例えば災害遺産のようなものも文化の一つと捉えていく傾向もございます。そうしたものを通じての絆づくり等も含めて考えていき、郷土愛や地域愛を醸成していくことも大事ではないのかと考えております。

それから、未知なる融合のところの3つの項目につきましては、文化財や文化資源をどう観光のコンテンツ化していくか、さらに外国人の方にもわかりやすい環境整備をしていく必要もあると思っておりますし、徳島県が力を入れてきておりますICTやアニメといったクールジャパンのようなどころへのさらなる注力についても考えていく必要

があると思っております。

さらに、文化による経済効果の発現のところでは、地域で生まれたもの、徳島で生まれたものを優先して消費していくという考え方にエシカル消費というような考え方もあるかと思うのですが、文化の部分もそうではないのかということで、当然他県や他地域にも優れたものはたくさんあるわけですが、徳島のことを見直して徳島で生まれた文化や徳島で育っているものを、まず我々が優先して消費していくということも大事ですし、育てていくということも大事ですし、そのようなこともここに記載しております。

一番下、未知の発信といたしまして、1回目の審議会で「v s 東京」の話もあったかと思うのですが、地域に対する誇りを持って、徳島ならではの魅力を発信していくということが、徳島県の情報発信ですので、そういった部分についてあわ文化というのは、まさに一番先頭に立って発信していくツール、徳島にしかないものというところと当然徳島の文化ということになりますので、そうしたものの発信を、より強力にしていく必要がありますし、いろいろご指摘もございましたが、その文化の情報が、なかなかどこにあるのかどこと繋がっているのかわかりにくいというところもあります。

これは関係機関との連携をどう緊密にとるかということもありますが、ワンストップ化を図っていくということにも、積極的に取り組んでいく必要があると考えております。

また、映像コンテンツ、あるいは映画祭といったような取り組みをしておりますのでこうしたところを通じてのクリエイターの育成や、そうしたものの展開、そして、国際スポーツ大会や、2025年の万博、あるいは国際会議の場も含めて、徳島県のあわ文化を発信していく。あるいは、あわ文化の海外への派遣を推進していくということにも取り組んでいく必要があるということをもとめております。

一番最後のページには、基本計画の各主体の役割分担ということで、前回の審議会で、誰がどうしていくのかということも必要ではないのかというご指摘もございましたことを踏まえ、取りまとめております。まず、県民が主役となりますので、まずは県民がいて、これを支える文化芸術団体、それは財団法人かも分かりませんし、NPOかも分かりませんし、あるいはその他の組織かも分かりませんが、文化芸術を進める団体の皆さん、それから小中学校や大学も含めた教育機関、それから企業メセナなどの形で文化活動に参画もしていただいております経済界のみなさん、そして身近な行政主体であります市町村と、より広域的な行政主体であります県が下支えをするという形で、それぞれの役割分担に応じ、県民一人ひとりの文化活動に向けて、魅力を発信できていくように、そういう役割分担をしていくということ。

そして県は、それぞれの相互の連携、協働を図っていくための中心的役割を果たしていく必要があるのではないか、そうすることで、文化を継承、発展、そして新しいものを創造していくことができれば良いのではないかとということで、記載させていただいております。

概要版ではない冊子の方には、さらに詳しく、より情緒的なところも含めて、記載しておりますので、事前にお配りさせて頂いたところですが、改めて、お読みいただいて、ご指摘いただければと思っております。以上です。

(会長)

ただいま、事務局から説明いただきましたが、この素案につきまして、委員の皆様方には前回の議論等も踏まえてご意見、ご提言をいただければと思います。

何人かの委員の方には、文章でもうご意見をいただいたところです。いかがでしょうか。

まず是非、真っ先に少し話したいという方がいらしたらお願いしたいんですけども、もしなければ前回までと同様に、全員の方に順番にやりたいと思いますがよろしいでしょうか。

(委員)

事前に資料を送りいただいていたので、一応、ざっと読んで来たんですけども、今のお話を聞いてよりよく理解することができました。「未知なる」と言うキャッチフレーズとか、「5つの視点」とか非常によく考えられていると思います。

ここで私の意見を付け加えてさせていただきますと、文化を育て守るというのと、もう一つ、新しいものを開拓したり、育てたり、創造したり、発信したりするということをおっしゃってましたが、そうなるとこの4番目とか5番目の部分になると思うんですけども、外からの視点というか、徳島が外からはどう見られているかという客観的な視点を入れる必要があるのではないかというように思います。

県外の人や、あるいは今は外国をターゲットしなければいけないと思いますが、人からどういうところに徳島を魅力を感じてもらえているか、あるいは、もっと知りたいと思っていただけるかということを考えると、1つ成功した近隣の例として、瀬戸内国際芸術祭というものがあると思いますが、あそこがうまくいっているのは自然と文化を融合したというところにあると思います。それで私も、県外の友達からよく、自然がいっぱいあっていいねと言われます。そこで、今の4K8Kの辺りを関係してくるのかもしれませんが、この豊かな自然を上手に使って文化と融合する、それが観光等にも結びつくような視点があっても良いのではないかと思います。

まだまだ知られてないということに、前回の会議以降に起こった大きなと言ったらあれですけども出来事として、NHKの紅白歌合戦以降、大塚国際美術館にはすごく人がたくさん、全国から徳島にこんなところがあったんだということが、私もSNSで友達からLINEに入ってきたりしますので、まだまだ知られていないんだなと思いますし、それを見た方が実際に足を運ばなくても、あの映像で鳴門海峡から遠景から入って美術館に行く、夜の映像ではありましたが、自然景観と芸術との融合の一つかなというように思われます。

瀬戸内国際芸術祭のようなものを模倣するわけではないけれども、なぜあれがうまくいっているのかということを考えて、徳島ならではの、四国ならではの発信の仕方というものもあるのではないかなと。

もう一つ聞いたことですけども、インターネット等の情報や伝聞情報ではあるんですけども、過疎化であることや高齢化であることを逆手にとって、希望の海というようなフレーズで世界に向かって発信したと、実際にそういう状況になっていると思います。

(委員)

資料をお送り頂いて、まず概要等のところで基本計画素案の具現化に向けた取り組みと、特にこのあたりで色々と、先ほどもお話ありましたけれども、「未知なる」というのが何回も出てきますので、今、話を聞いて非常によく分かったところで「未知」と「道」とが合わさっているとか、あるいは基本計画の方で具体的に色々と、「徳島ファン」という名称も出てきたりして、色々よく考えられて配列、あるいは言葉を作り出していくというのは非常に難しいんですけども、そういうことに一生懸命取り組まれて、新たな言葉もたくさん出てきて非常に良いのではないかと思います。

それともう一つ、方策のようなことや現状分析のようなものも色々やられており、これも素晴らしいわけですけども、その中で今年の近畿高等学校総合文化祭がございまして、その総合開会式、11月10日だったと思うんですけど、知事にもお越しいただいてご挨拶頂いただいたんですけども、この資料の8ページにも出ております「あわ文化4大モチーフ」、阿波藍、阿波人形浄瑠璃、阿波おどり、そしてベートーベン「第九」、アジア初演の地というようなあたり、これにおもてなしの文化等も入れまして、基本的にベースとして「阿波藍」がまず徳島でどのようにして発展してきたのかと、そしてまた全国的にも10番目ぐらいの大きな街であったというようなこと、それから全国市場を阿波藍が独占していたというようなところから、人形浄瑠璃あるいは阿波おどりなどが、生まれ育まれてきたその背景には、吉野川の氾濫などが影響もしていたというようなことで、非常に壮大なスケールで描かれておりました。

それで、各県の生徒実行委員やあるいは来賓の方々からも、非常にお褒めの言葉を頂いて、本当に素晴らしい総合開会式ができたわけですけども、その時に私、思ったのは、徳島にはこんなに素晴らしい「4大モチーフ」といいますか、そういう文化や経済のようなものがあつたんだ、あるんだと、現在もあるんですけども、そういう、ここにもブランドの創出のことを書かれておりますけれども、売り出していくのにインパクトの強さが必要なのではないかと。「4大モチーフ」これからも大事にされ、発信もされていくものだと思うんですけども、また新たな「4大モチーフ」のような、例えば、愛媛県の松山駅に降り立ったら「坊ちゃん」を始め、色々この間も、愛媛県松山市で中四国の校長会がありましたけれども、そんな時に劇団のような若い人が来まったり、高知へ行ったら龍馬を中心に、また同じような劇団のようなものがあって、駅前などで色々活躍をしたり活動しております。ですから、そういう何か徳島、あわ文化を売り出していく、インパクトの強いものが、芸術文化の発信というものの中には必要なのではないかなと、徳島駅に降り立っても何か普通の街があるだけのような感じがしたりもします。

そうした中で、よそへ行けば、売り出していくものが目の中に飛び込んでくるというようなところもあろうかと思いますので、是非こうした計画の中で今後こういうようなものを推進していくにあたって、そういう観点も、インパクトの強いものを作り出して行けるような取り組みもされてはどうかというように思いました。

(委員)

まず、前回「未知なる」より「未知へ」の方がいいのかなと瞬間的な印象で申し上げましたが、今日は「未知なる」ということについて説明をいただきまして、十分納得いたしました。

それで、この9ページにもございますし、他にもございますが「未知なる世界へ」で「！」がありますね。そして、「道成るあわ文化」とございますが、この「！」の後はひとマス開けていただきたいと思います。文章を書くとき原稿もそういう記号の後は1マスあけるという決まりがございますので、ここも1マス空けた方がよくわかるんじゃないかなと思いました。

それから「徳島ファン」というのは、皆さんもおっしゃられたように私も素晴らしいと思います。徳島「ファン」このカタカナがひらがなであつたら、ちょっとイメージが柔らかく新鮮になるんじゃないかなというような気持ちがいたしました。カタカナだったら今まで通りのファンなんです、ひらがなにしても面白いんじゃないかなと、これも今、急に思いついたことでたいしたことではございません。

それから先日、テレビを見ておりました。徳島に来た外国人が祖谷の温泉に行きますが、全国で外国人が温泉で一番にあげたのが祖谷だと言っていました。景色が良いとともに温泉の温度が40度でぬるい、それが外国人にはとっても適しているんだというようにテレビで言っていました。沢山有名な温泉がある中で、祖谷温泉が一番というのは、私はものすごいことじゃないかと思いました。やはり自然の素晴らしさと、外国人に合わせたわけではないんだけれども、たまたま温度が低かった、草津温泉なんかは45度もあって、熱くて火傷しそうで入れないんだそうですけれども、そういうようなことも大事なことで教えてもらいました。

それから外国人につきましては、香港と徳島空港の直行便ができたということも、とてもありがたいし、こういうところをもっともっと積極的に進めて行ってもらいたいなと思います。

それから、今、高校の文化祭での阿波藍という話が出ましたが、その歴史についてはあまり知られていないところがとても多いんですね。第二次世界対戦の時に食物以外のものは栽培してはいけないという決まりになりました。阿波藍是一年草ですので、1年育てて種を取らなければ絶滅してしまう。そういう中で、食事食料になるもの以外は作ってはいけないという、そういう厳しい掟がございました。上板とか藍の産地はもうこれで絶滅するというようなことで、戦争が終わってやっと何を作ってもいいようになって、種がないという時に佐藤藍師の17代目が、神棚から小さな袋を持ってきて、あけたらそれが藍の種だった。

それはどうしていたのかといえば、誰か名前は言えないけれども、憲兵や警察の目を逃れて、分からないところで命をかけて藍を作り続けてくれた人がいたから、この種があるということで、阿波の藍の存続があったという歴史を知りました。それが誰であるかは迷惑がかかるから言えないと、さらに二十何年経った時に法事の席でそれが佐藤平助17代目の奥さんのお姉さんだったということが分かったというような歴史もございます。

本当に、一人の老婆の命がけの苦勞もあって、阿波藍が今あるという、このような歴史も、私はもっとどんどん語っていききたいなと思っております。

(委員)

県として、とても熱い情熱のあるこうした書類ができて、討議がされております。あと私が思うのは、各市町村です。県と市町村との温度差をいかになくしていくか。そのために、県から各市町村に、自分の市町村には、どのような個性があって、県に対して何をしたいか、どうしたいのかという、そここのところの連携を密にさせていただいて、県が浮かび上がるだけじゃなくて、市町村に至るまで同じく温度差がなく、そういう情熱で盛り上げていくためにはどうしたらいいのかということ、今すごく感じております。

だから、各市町村から吸い上げるということも大事だし、吸い上げられなかったら県から「あなたの町はこんな魅力あるんだから、もっと発展させたらどうですか？」というような、県からのアドバイスもあった方がいいんじゃないかと思っております。

色々皆さんのお話を伺っていて、先ほど大塚国際美術館の話が出たんですけども、私たちが思ってる以上に、やっぱり米津さんの効果はすごい大きくて、あの放送の後、東京の友達等が「徳島ってあんなすごい美術館があるんだよね」という反応の大きさに驚きました。

自分が教えている高校生とも話したんですけど、徳島県民の良いところでもあるんですけど、身びいきの逆に行くような気がするんですね。十数年前に大塚国際美術館ができた時にも、広いなあとか全部偽物やなとか、あの周りには、今でこそ、レストランありますけども、最初はポカリスエットしか無いよねとか、行くのめんどくさいよねとか、値段が高いよねとか、言っていました。

そういう事を、あの放送で、県外の方々からそうじゃなくてすごいよねと、逆に言われたら、そうなのかなと徳島県民がもう1回考えたような気がするんです。

よく聞くのが、例えば、徳島に着き、徳島駅に降りました。タクシーに乗りました。タクシーの運転手さんに「何か徳島でおすすめのところありますか」と聞いたら、「何もないわ。渦潮ぐらいかな」とかいう、徳島県民って実は徳島のことをすごく好きなんですけれども、好きだというの表面に出さないととか、本当は好きなくせに「あかんわ」とか「何もないわ」と、何かそうした癖があるような気がするんですね。ですから授業でそれをやめようと、やはり県外の方に対して、外国の方に対して、アピールしようと、我々努力してるんですけど、その前に徳島県民自体がもちろん県が主導をとって、徳島の魅力をもう1回確認しないと、なんかその旗だけ降って県民がついてきていないような感じがするんです。

ですので、もう1回県民に、徳島ってこんなにすごいんだよということを分かってもらおうプロジェクトなり何かができたら、これから県がやろうとしてることのもっとバックアップになるような気がしました。

それで、私達の当たり前が県外の人には当たり前じゃないというのを、やっぱり東京の友達と話してて、例えばなんでもいいんですけど、ちくわに竹がついているだとか、わかめは噛まないといけないとか、本当になんでもないことじゃないですか。三味線を背中に背負っておばちゃんが自転車に乗ってるとか、そういうのは県外ではまず、あれだけの数の三味線弾いてる人がいるのも、阿波おどりのおかげですし、釣竿を肩に3人

ぐらいで中学生が普通に走ってますよね。ああいうのも、やっぱり自然があって魚がどこでも釣れるからあることですし、そういう魅力、それから生でお遍路さんが見れるとか、別にお遍路さんを見ても私たちは「お遍路さんだな」としか認識しないんですけど、やっぱり本物のお遍路さんを見たときというのがやっぱり違います。

どうしてそういうことを思うかというと、前回も言わせていただいたんですけど、今年3月にメキシコの子供達を呼んでクラウドファンディングで、県にも助けいただいているプロジェクトを影で少しお手伝いをしてるんですけども、その時にメキシコの子供達を家に連れて行こうと、よく仲良くして頂いてる祖谷のそば打ちのおばちゃんの所へ行ったらそばうち体験か何かできないかと、この間も打ち合わせと称して遊びに行ったんですけど、その時にも祖谷の中学校まで行って一緒に何か交流ができないかと、今、話が進んでいるんですけど、私自体、東祖谷まで行くのめんどくさいし西祖谷で十分だと思ってたんですけど、やっぱりそこで面倒なことを越えた時にもっと素敵な事がありますし、おばちゃんの所に和食のすごい有名な人が後、お蕎麦好きな俳優さんなんかの色紙がいっぱいあって、「ここには本物の味がある」みたいな色紙を見た時にやっぱり祖谷の素晴らしさ、徳島の素晴らしさ、平家の何代目の殿様にもお会いして、建物も今、新しく立て替えてと、いろいろ進んでいます。

それともう一つ、スタッフの育成、文化の育成で、メキシコの方から聞いたんですけど、国がお金を出して過疎の村に、民族音楽が消えかけているので、5箇所ぐらいの村まで行って、バイオリンをやってる子たちを教えて、それで指導者であり継承者を育てるプロジェクトがあるそうなんです。だから、あわ文化、阿波人形浄瑠璃だったり阿波おどりと色々ありますが、そういう中で消えかけているものに対しても、何か打つ手があるんじゃないかと思いました。

(委員)

先ほど説明していただいた、「未知なる」ということはすごくいいなと思いました。この言葉を聞いてすごくワクワクすると言うか、どんなものなのかなと、ちょっと興味が湧きました。

先ほど説明していただいた5つの視点のうちの一番最後の「発信」というところで少し思ったのが、先ほどもお話があったんですが、紅白歌合戦に米津玄師さんが出たということですから徳島がアピールされたというか、県外の人にもすごく知ってもらえた機会だったのと、私も見ててすごく思ったし、テレビって、すごく情報を得やすいなと思いました。

小さい子供でも高齢者の人でも、携帯電話を持っていなくても、テレビだったらすごく気軽に情報を見られるし、すごく幅広い年代の方が情報が得やすい手段だなと私はすごく思いました。

(委員)

最初の資料を頂いてから今回まで、大変皆さんご苦労されて、うまくまとめたなという感想を持ちました。今回、ご説明をお伺いして、非常に悩みに悩んだ結果だろうというようにも思いました。

先ほど、吉野川がもたらした阿波藍、それから阿波人形浄瑠璃、阿波おどりという話もございましたけれども、徳島の人達、本当に阿波藍で裕福だったということで、特に昔の方は浄瑠璃を語られる方がすごく多かったんですね。で、ご家族の方々はそれをおじいさんおばあさんがいつもあれは唸ってたと言うんです。本当は語ってたんですけども、ですから十郎兵衛屋敷に来て「昔よう聞いたけんもうええわ」というようなことで、なかなか徳島の人の中へ来ない、入っていただけない。

逆に県外の方は、おじいちゃん、おばあちゃんが語っていて聞いた歌、一節のところがここなんだということで、おいでて頂いてすごく感想して帰って頂いてます。特に十郎兵衛屋敷では今、吉野川がもたらしたということで5分ぐらいの映像にまとめて、吉野川、阿波藍、それからそれがもたらした阿波人形浄瑠璃、そして川内町の特産物で皆さんあまりご存じないかと思うんですが、吉野川の汽水域で栽培されている海苔はすじ青のりなんです、すじ青のりは、普通のあおさのりと違って、出荷量日本一なんです。しいたけの出荷量も日本一。そういういろんな産業に結びついていったことなどが合わせて全国に発信できてない。というより徳島の人知らない。徳島の人徳島の良さを知らないという事が、やはり問題じゃないかなという気がしていますので、これからいかに徳島の人に徳島の良さ、皆がこんだけ頑張っているいろんなことをやっていて、文化の発展や経済の発展のために努力しているんだというようなことも合わせて、何かを発信して合わせて文化がどんどん発展していくようなことになればいいんじゃないかなと思いますけど、非常に難しいとは思いますが。

十郎兵衛屋敷には、そういう徳島の文化を説明する映像があるので、皆様にも是非ご覧いただけたらと思います。「あ、なるほど」とその映像が流れた時に、最初の頃は拍手が起きましたので「おお、吉野川素晴らしい」ということで、そのような映像もまたご覧いただけたら非常にありがたいです。もう1度徳島を認識というか見直すいいきっかけになるような気がしますので、是非どうぞ。

(委員)

まず一点だけ先に言っておきますけど、申し訳ないですけど、私の言語感覚、それと読解能力でいうと、未だに僕は「未知なる」というのが何故ついてるのか分かりません。ごめんなさい。これはもう正直、僕自身のこれまで読んできた文章や書いてきた文章等の世界観であって個人的な見解ですので。それで、皆さんが十分にいろいろなものを練り上げられたのは、これを見て十分承知してます。だけどそこだけは、一言まず。

それで今、いろいろなものの魅力の発信やそういうことを皆さんご指摘になられたので、少し私、現実問題、これもう平成31年度から進めていくという中では、ある意味待ったなしで、予算になるのかどうか分かりませんが、いろいろなことも絡んで進めていくことだろうと思うんですけど、一部テクニカルな面で、こういう点どうなっているんだろうということを質問させていただきます。

一つは策定の趣旨というの、ぼんやりとしている感じもあるんですけども、到達点がどこなのかというのが見えないんですよ。じゃあ、文化に到達点というのはあるのかと言われたらそこまでなんですけれども、県としてこうして審議会まで開いて、皆さん方本当大変な業務の中で新たな起案をしていく中で、どこに着地したいんだと。県

の考えとして、今、現状がこうであって、じゃあ70点にある、いやそれ数値化されるものじゃないですよ文化だから、70点にあるのを85点にこの5年間であげるためにやるんですかという、その部分が何か伝わってこないんですよ。

県は、何のためにこれをやるんだろう。そうか、県は今まで何も文化のことをやってこなかったのか、今からこんなものを出してきてと思っちゃうんですよ。じゃあ、ここでこの計画をつくることによって、この5年間でももちろん文化というのを軸にして、中にもあるようにインバウンドの話だとか色々ありますけど、派生させてどこまで何をどうしたいのかというのが僕は知りたいし、おそらく納税者というのは、県が新たなことを始めるとどうなるんだろうということを知りたいと思うんですよ。

その部分が、僕はやっぱりこの中でその視点と言うか、それをどこに置くのかというのが見えて来ないというのがあるのと、あと二つあります。先に言っておきます。

もう一つは、こちらの概要版にもありますし、本体で言うと最後の計画の検証についてという部分があるんですけども、進捗状況を検証すると書いているんですけど、先ほどの話と同じなんですけれども、じゃあ、その進捗状況って何という話なんですよね。いや、だからその文化を通じて例えば、阿波十郎兵衛屋敷さんの入場者数、入館者数が一万人から一万二千人になったらいいんですかという話だし、つまり検証すべきことは、何を毎年度検証していくのかというのが全くわかんないんですよ。

だから、検証して必要に応じて見直していきますとはいっても、そもそもの入口の段階で何らかの目標設定、数値設定が、だから繰り返しになりますが、文化に数値って必要なのかと言ったらそれまでなんですけれども、着地点が見えないのに検証していくというの、あれっというのが、これをしていて思ったことです。

それともう一点、前回も結構、私、このことを言わせていただいたんですけども、口当たりよくこの実施主体、各主体の役割というところで、もちろん、みんなでやりましょうというのは、美しいことだし素晴らしいことだと思うんですけども、結局じゃあ誰が責任を取るのか、ヘッドクォーターはどこなの、みんながやるということは、みんながやらないのと一緒にだねと、やはり僕なんかは考えてしまうんですよ。

じゃあ、本当に強力なリーダーシップ持って旗振る組織はあるんだろうか。もちろんこれをご案内いただいたのも徳島県県民環境部県民文化課が事務局ということになっていると思うんですけども、じゃあ、先ほども各市町村ともっともっと情報共有しながらという話がありましたが、じゃあその窓口もそうなんですとか、あるいはもちろんこれ学校現場の役割なんかものすごく必要だと思うんだけど、じゃあ教育委員会との連携はどうなのか。じゃあ、あえてこれを推進するために新たな組織ができるのかとか、そうしたことも含めて、やっぱりここまで広範にやるということは、大方針を示すことによって県庁の各部門の皆さん、それにいろんな各種団体の皆さんからお知恵を出していただきたい、それに則っていろんな活動を提言して欲しいと思うから、こうやってなさっていると思うんですけども、やっぱり主体の所、本当に誰が責任を持ってそれをトータライズしていくのかというところが、見えてこない戸惑うと思うんですよ。

僕らもこういう議論の中に加わって、こういう説明も受けてますけど、では新年度こうした基本計画ができて、じゃあ、市町村さん頑張ってと言っても、はあっということだと思うんですよ。

だから、やっぱり少しテクニカルな話になって申し訳ないんですけども、到達点はどこなんだろうという部分と、検証するにしてもその進捗状況は何か、これは裏表のことかもしれませんけども、それとやはり各主体の役割というところで、一体どこが責任をもってこれを進めていくのか、何かあった時に本当に腹をくくっていろんな意思決定というのをやるのはどこなんだろうと、それをやっぱり知っておきたいなというところ です。

(委員)

今、いろいろな委員の意見を聞いていて、なんて言うんでしょうか、一つずつもう少し具体的にその着地点をはっきりさせるために、一つずつ具体的に考えを煮詰めていく と言うか、意見交換をしていくことが必要なのではないかとこのように感じました。

それで、私は今回、この概要版を見せて頂いて、それで徳島ファンの拡大という点に ついて、少し思うところを話させていただきます。

毎年の観光ですとか、スポーツ観戦ですとか、それこそこの間の米津玄師さんのコン サートなんかでも県内の人もそうですが、県外からもたくさんの方が徳島に来られてい ると思います。それでたくさんの方が来て、その目的、観光であるとか、阿波おどりだ とか、十郎兵衛屋敷でもいいんですけども、目的以外に何かしてもらえるようなプラス アルファのことを考えて、そのプラスアルファをしてもらるように仕向けていくよう な仕掛けというのがあればいいのではないかとこのように思います。

だから、前回の審議にも多分あったと思うんですが、例えば徳島空港に降りたつても 観光にどのように行ったらいいのかだとか、そういう具体的な表示が少ないというよう なこともありますし、駅前でも多分そうだと思います。そうした県外の方が、徳島をも っと知れるような、もっと徳島のどこかに行けるような、そういう仕掛けというものを、 もう一度見直して色んな所に設置していくこと。パンフレットでもいいですし、何か映像 を流すのでもいいと思います。そうしたことをしていくのが大切なのではないかと思 います。だから、徳島ファンというこの言葉も良いんですが、徳島の何かのファンとい うそういうものを、何か商品でもいいですし、食べ物でもいいですし、それこそ景観で もいいと思います。何かそういったのをもっとみんなで考えて売り出していくようなこ とを考えていく必要があるんじゃないかなと思いました。

(委員)

皆さん、個人的な体験を基に話された会話を聞いておりまして、非常にベースのとこ ろでたくさんの情報をお持ちなんだなということで関心をしていました。

それで私の方から、まず、冒頭に手前味噌ではあるんですけど、米津玄師さんの年末 のNHKに関してですけども、僕は、全国放送であるNHKの演出力の勝利だと思っ ているんですけど、やはりまだテレビというのは力があると言うか、情報を発信するメ ディアとしての力を失っていないということが逆に裏付けされた。ネット社会になっ ても、やはりテレビが基になって、ネットで拡散していくというスタイル。ということ は、形としてはまだまだ維持をされているんだなということ、逆に実感したというこ とで、全国にネットワークを持っております四国放送とNHK徳島、そうしたものを大

いに活用していただきたいなということを、最初に申し上げておきます。

それと、主に4番目、5番目の所に私は注力するのですが、まず新たな文化ということでアニメ文化があります。

ここに参加しておられる方は、あまりアニメ突っ込んだ情報というのはお持ちではないだろうなと思って、敢えて提案させていただくんですけど、二年に一度、広島国際アニメーションフェスティバルというのがあって、もう20年、それこそ平成か平成になる前ぐらいから、ずっと二年に一度必ず夏に行ってるんです。

国際的なアニメーションフェスティバルでして、フランスのアヌシ、それからクロアチアのザグレブに次ぐ世界三大アニメーションフェスティバルと言われてます。

実際、日本はクールジャパンと言いつつ、そういうことはあまり一般には知られていないという現状があります。今そのクールジャパン、アニメーションと騒がれてるのは非常に表層的な部分だと僕は感じております。

生まれた時からアニメーションで育てられたというところもありまして、死生観とかそうしたものを自分の中で構築するのに大いに力を持っていたなというのが私の実情なんですけど、実際今流れてるアニメーションというのは、テレビアニメーションですね。それから劇場のアニメーションですね。もう10年20年前から比べるとかなり力を失っているというように僕は感じています。

やはり本物の力と言うか死生観、人生観、個人で構築するためのものというのは、やはりそういう国際的なところ、国際フェスティバルに行きますと、非常に中身の濃いものをたくさん見ることが出来ます。そういうところのパイプと連携して、本物のクールジャパンというものを、徳島を一つのポータルにして発信していくということも可能なんじゃないかなと思っております。それをちょっと文字をいじりまして、「クール ジャパン」をいじって「クール トクシマ」みたいな感じですね。

それと、インターネットポータルサイトを作ったりだとか、それに連携して徳島ファンというのが先ほどワードとしてありましたので、これも一つ、ファンという言葉を知解いてみますと、英語で行きますと「f a n」というのと「f u n」という二つのファンがあるんですね。一つの「f a n」というのは、愛好者・支持してる人、好きな人たちが集まってるというか。もう一つの「f u n」というのは楽しむ。実は2つのファンということも解釈ができるということもあります。

そう言ったことを踏まえて、全体トータルの、「未知なる」世界へ！道成るあわ文化」というキャッチフレーズ、そことも、絡めまして「クール トクシマ」「徳島ファン」ですね、そういったものを全体をひっくるめたロゴマークと言いますか、そうしたものをアウトプットとして、この会の成果の一つとして出すべきではないかというように僕は考えます。、「v s 東京」は、私の中ではかなりインパクトを持っているものですので、あれと肩を並べると言いますか、あれと共用可能な感じのロゴマークというものもあっていいんじゃないかなと思っております。

最後に、香港の直行便の話がありましたが、実はあれ、インバウンドを狙ってるということで徳島に来てくださいという、そういう売り込みの仕方がメインではあるんですけど、私は逆に徳島から向こうに発信していくという手もあるんじゃないかなと考えておりまして、まあ、それが例えば文化団体の活性化の一つ、文化活動への若者参加の促

進のところの、芸術家派遣による次世代の人材育成とか、そういった発表機会の拡充というのにもつながります。

例えば、徳島でそういう芸術活動を行っている人たちに、どこからかと言うとちょっと無責任なんですけど財源を確保して、逆インバウンドみたいなもので、向こうに仕掛けて行くと、向こうで展覧会などをして、今、阿波おどりだとか、そういうものはイベント等やってるので、テレビでもよく拝見をしてるんですけど、それ以外ではLEDがちょっと絡んでるかなというぐらいの感じですよね。

そうしたものではなくて、先ほど言った「クール トクシマ」から、「徳島ファン」そうしたものを「v s 東京」と絡めた形のロゴマークを作った上で、海外に発信して海外で展覧会をする。海外のテレビメディアに取り上げてもらう。そうしたことも可能なのではないかなというふうに考えます。

（事務局）

すいません。先ほどのご質問にお答えさせていただきます。

まず、目標がないということと、進捗状況の確認をどうしていくのかということですが、今回少し説明不足なところがあったんですけども、目標については、次回お示しできたかと思っております。といいますのが、現在、県の行動計画という上位の計画を策定中でございまして、計画の整合性を取るためと言いますか、そうした関係がございまして、行動計画と合わせた形で、次回お示しさせていただけたらと考えているところです。

それともう一点、実施主体の話でございしますが、あくまで県民主役ということで、県民に文化活動を頑張ってもらくということなんですけど、それを芸術団体から市町村までの団体が色々サポートして行くんですけど、それらの最終的な総合的な調整は計画を作ります県がやっていくということで対応していきたいというように考えております。以上です。

（委員）

目標設定等のところは理解しましたがけれども、前回も私お話しさせていただいたように、やはり文化と名がつくだけでも、もうすでに既存のものがたくさんあるわけなんですよね。運用されているいろんな組織であったり、委員会だとか財団だとか、だから本当にそれに新たに一つ何か加わっただけというのであれば、何のインパクトもないし、県が改めてやろうということにならないと思うんです。

つまり、今既存にあるものをさらにそれを包括するのか。それを整理、統合できると思わないけれども、いろんな立場の人たちがやってますから。だけど、本当に意味のあるものを乾坤一擲、県としてこういう形でやる以上、「県民が主体ですよ」と口当たり良いんですよ。それはもうその通りだと思うんです。納税者ですから。やるのはいいんだけど、やはり最後の部分というのは、これまでじゃあ色んな団体との調節をどうするんですかという時に、本当に上下の話し始めたらきりがないですけども、本当にそこでいろんなものを、いや、県としてやはりベストチョイスはこうなんだと、そのためにもこうやって行くんだと、本当にリーダーシップを持ってできる、その発言ができる、

調整というよりもそこできっちりとこうなんですと、これがこの基本計画に基づいて徳島県を高めていくためにこうなんですと、啖呵が切れる人がどこにいるんだという話なんです。結局は。

それは、全部知事に帰結されるのであれば、それもいいんでしょうけれども、本当に県の部局の中で、教育委員会の方もいらっしゃいますけど教育委員会と「あれ、またあっちがあーだこーだ」、「あれ、こっちも同じことやってる」とか、よく言われると「この文化財団さんもまた同じ事やってるよ」とか、それだったら僕は意味がないな。前回からこれは繰り返しになりますけどね。

だから、本当に少し言葉が悪いんであれですけど、本当にどこまで腹くくってこれをする体制を整えてるんだというところをやっぱり知りたいんですよね。それが今の答弁だと言葉が悪いですけども「官僚答弁ですよ」と思ってしまうわけです、私なんかの立場から言うと。

(事務局)

ありがとうございます。この県の文化の計画、文化芸術推進基本計画ということで、県民文化課が所管してます。最終的には、連携する団体がたくさんございます。それぞれに実施していただくこともたくさんありますでしょうけど、当然、県がリーダーシップを取ってやっていきたいというように思っております。

(副会長)

前回の色々発言させて頂いた部分、論理的な話ということで、項目立ての部分も勘案をして頂いて、よく5つに、5つは5つで5本柱なんですけど、だいぶん整理をさせていただいたと思います。担い手の関係とか、経済や産業の活性化をきちんと分けて頂いたと思います。よくできていると思いますが、2点ほど確認をさせていただきます。

まず一点目なんですけど、素案の5ページですけども、資料2の5番目のこれからの文化芸術振興の課題とありまして、いろいろ五つあります。具体的な課題として次の五つの視点を掲げますって、これ課題と書いてますけど、これ(2)だけ課題という言葉が出て来てますけど、あとは全部視点だろうと思うんです。

なおかつ7ページの6-2の基本的方向性の一行目で、前項で掲げた5つの視点というように書いてあって、課題とは書いてないんですよね。

本当に課題を書くのであれば、今いろんな解決すべき課題みたいなものを考える必要があらうかと思いますが、そうでないのであれば、ここはもう、これからの文化芸術振興の視点という言葉に置き換えた方がいいんじゃないかなと思ったのが、一点。

二点目ですが、先ほどもお話がございましたように、K P Iと言いますか、数値目標がない、これは事務局の方からご説明していただきまして、行動計画との整合性はよく理解できますが、それを基本計画の中に落とし込むのか、それともいわゆる実施計画のような形でこの基本計画を具体化する計画みたいつくられるのかも後でお聞きしたいと思います。

それに関連して、少し細かいことになるかもわかんないんですけども、文化というか、伝統文化、何をもって伝統文化かと言われたら難しいと思うんですけど、例えば本学で

は、今年度の一つのプロジェクト事業として、祖谷の方が入りまして、かずら橋を作って、かづら工芸職人の伝承がかなり危機的な状況にあるということで、そのまま伝統技術を継承するための一つのプロジェクトで色々あそこへ入って、デザイナーとマッチングしてもらったり、その土地の方に来ていただいて、ご指導いただいたりというようなことを、「4大モチーフ」のような有名なやつは別にして、隠れたといいますか、そういう伝統技術あるいは伝統文化みたいなやつを拾い上げる作業みたいなものですね。

こうしたものも、やっぱり拾い上げていって頂いて、そんなに目立っていないけれども残しておくべき文化芸術、あるいは技術、こうしたものを大事にしていく必要があるのかなと思います。これは是非お願いしたいと思います。

よろしくお願いします。

(会長)

私も気にはなっているんですね。要するにこの基本計画は、5年ですけれども、5年後に徳島県の文化や芸術がどのようなのかというのが見えてこない。やはり目標はあった方が良く、あるべき姿、目指すべき姿というのが、概要の3ページにあるんですけど、そこが「未知」なので少し分かりにくいと、そういうことなんですね。

「未知なる」という言葉そのものは、これまでやっていないと、そういう意味でこれまでやっていないことをやるんだという意気込みはいいと思うんですけど、でもやっぱり、どこを向いていて、5年後にあわ文化、芸術がどうなるんだと、そうなったらいいなとみんなが思う、そういうものが見えにくくなっているということはあると思うんですね。

ですから、最近のいろんな物事の解決の方法として、あるべき姿、到達点を掲げて、そこに行くにはどうしたらいいのかを考える、いわゆるバックキャスティングという手法、こうしたものをもう少し使った方がいいのかなと。あるいは逆に、現状をよく分析して、何が課題なのかということを考えて、それを解決するようになる、フォーキャスティングな手法、それも1回目のこの会で、いろんな団体が良いことやっても伝わらない、参加者があまり来ない。ところが、参加したい人にとっては、どこに何があるのかわからないという、割と具体的な問題点の指摘があったと思うんです。

これは基本計画なので、実施計画などでそういう細かなことが考えられるんじゃないかと思うんですけど、どこかでやはり、その現状の分析をきちんとやって、まだ気がついていないようなものを掘り起こしてみるだとか、そういう作業が必要なのかなと思います。

ですから、この基本計画を踏まえて、次に実施計画が作りやすくなればいいと思うんですよ。ここに具体的な事が余り書かれてなくてもね。ここに書き込んでなくても、具体的なことを考えていないと、次に行けないと思いますね。具体的なことを考えてはどうかという意見もありました。それが、私が皆様の意見を伺って感じたことです。

(事務局)

先ほど、副会長から、また会長から、具体的な実施計画をどうするのかというようなお話をいただいたんですけども、この後、数値目標を作りますけれども、数値目標を

達成するために、こんな事業をやって行ききますということについて、整理をしてお示ししたいと思います。

そうした事業の進捗について、毎年度、こういう事業で、このような成果がございましたというようなことを説明して、検証して頂くことができればと考えております。

(会長)

この概要で言うと、4ページの、1番右のカラムに、割と個々の課題みたいなものを書いてあるんですね。これについては、委員の意見を踏まえるとこれは誰がやるんですかというようなことをちゃんと想定して書かれてるといいんじゃないかなと思うんです。

(委員)

印刷ミスだと思うんですが右の方に7行目には阿波創造文化賞とございます。資料2の分は、10ページに阿波文化創造賞になっています。どちらが正しいのですか。

(事務局)

失礼致しました。阿波文化創造賞です。

(委員)

県に、徳島県文化賞と阿波文化創造賞があって、公益財団法人徳島県文化振興財団で、とくしま芸術文化賞と奨励賞、出版文化賞があって、文学書道館では文学賞があってと、私、いつも分からないんです。文化振興財団から推薦してくださいという書類が来るんですけれども、よく分からないんですよ。

だから、これを一つにして整理をして、これはこういう人、これはこういうように選ぶと、県には一本化してくれたらもっと見やすいかと、みんなそれぞれ違うから、発信が違うんですけれども、受け取る方は分からないんです。

(委員)

はい、私ももう1回考えてみたんですけど、「未知なる」という言葉がちょっとなじまないという部分で、「未知との遭遇」が多分一番有名だと思うんですけど、「未知」は名詞だとすると確かにおかしいかもしれないと思います。名詞の後に「なる」がつくのは、私は文法の専門家ではないんですけれども、例えば「華麗なる」だとか「静かなる」だとか形容動詞の後だったら「静かな」、「華麗な」と付くかもしれないけれども、「未知」という名詞の後にはもしかしたらつかないかもしれないので、文法的なキャッチフレーズですから、お確かめになられた方が。こうした使用もあるかも知れません。分からないですけど、お確かめ頂きたいと思います。

(委員)

アウトプットということが、職業柄といいますか、基本的にグラフィックデザイナーというのは、アウトプットが肝心かなと思っておりますので、やはり目に見える形で広く見せないといけないということはあると思うんです。

いくら文言を考えても、それを読んでもいいというのでは伝わらないので、やはり一瞬で伝わるものとして、ロゴマークというのは、未だに絶大な力を持っていると私は信じてますので、そうした形にすれば、ある意味一つのこの会議の着地点と呼べるのではないかなというようにも解釈しているんです。

なるべくお金をかけないでというところもあるんですが、本来ならそういうところはやはり、プロフェッショナルに任せていただきたいというところもあるんですが、色々事情もおありだと思いますので、具体的にはやはりインバウンドの逆に行くという意味も、外へ出すという視点に立った時にも、やはり何か一つ、それこそ皆さんにお配りしたこういうものですね、この一つでまず伝えると言うか、そうした形に我々は力点を置いていますので。

ちなみについてですけれども、お配りした「平成」と書いてあるチラシですけど、今月15日から17日の間「平成マイベストデザイン展」ということで、平成30年間の総括する形で、日本グラフィックデザイナー協会の徳島のメンバーが一同に会しまして、30年間のベスト、自分なりのベストというものを展示するという企画であります。

その中で、キャッチフレーズの話に少しつながるんですけど、「平成という時代に私たちデザイナーは何をなしたか」ということで、何を成すというところにも平成、の「成」という文字が入ってますので、「平成」という言葉が一義的ではないにせよ平和を成すというような解釈であるとすればデザイナーは何を成したのかという、そういうニュアンスのキャッチフレーズであります。

一つのご参考になればなと思いつつ、お時間のよろしい方は15日から17日まで、近代美術館ギャラリーで開催しておりますので、是非足をお運びください。

(委員)

「藍」の 때가、難しい字でロゴになっていますが、私、あれはものすごく素晴らしいと思うんです。ああいうロゴが欲しいなと思います。

(委員)

それに負けないように徳島から発信していかないといけないんですけど、そういう県外から招聘されたデザイナーと、勝負をしているのが「VS 東京」だと、僕は解釈しているんですね。それに対抗すると言うか、共存、共用する意味で、徳島から本当の意味で徳島県人が発する、そうしたロゴマークというものをやはりどこかで作る必要はあるのではないかと考えております。

(委員)

藍のエンブレムに負けないようなエンブレムを作って頂いてもいいんですけど、それをどこにどう使うかということももっと考えないと、県庁からあの藍の文字が、裾野まで出てこない感じがまだしています。だからそれをどのように生かすかというのも、トータル的に、やはり良いものじゃないといけないじゃないですか。だから良いものが、もし上がってきたとしたら、それをいかにというのが。昔、国民文化祭で良い曲を作りましたよね。「風に乗る〜」とか、その曲は、今、音楽的に言うとどう生かされてるん

だろうと、なんだか使い捨てで終わってしまっているような気がするので、そうならないように、継続、だから5年後に、文化が熱くもっと上を向いて、計画期間の5年を終わっても上昇志向にあるような、地力をつけることというのが、ひとつの大事な落としどころではないかと思います。

(委員)

先ほど私、誰がリーダーシップを牽引していくのかということと言ったことについて、皆さんからも仰って頂いてるようなところだと思うんですけど、変な話、リーダーだとか意思決定だとか言っていたら、この言葉も硬いですけども、どこに、文化のコンセプト、トータルコンセプト、いわゆるそのトータライザー。いわゆるリーダーだとかガバナンスがどうのこうのという言葉ではなくて、言葉を使うのなら本当にプロデューサーですよ、つまり「あわ文化」という言葉を使ったのなら、あわ文化の本当のプロデューサー、またそれを答弁的に「それは県民一人一人、皆さんがプロデューサーです。」なんて言い出したらきりがないので、本当にさっき言ったロゴをどうするのか、どう発信していくのか、そういったことも踏まえて、本当のプロデューサーみたいな形を誰が担うのか。

だから変な話、言葉も悪いですけども、たくさんお金をかけて、有名な人を呼んできて、この人に名前だけでもやってもらおうということだったら多分意味がないことだと、僕は、この計画の趣旨からそう思いますので、本当に県内で活動して来られた方、本当に県内で地に足つけて、本当に自分目線でいろんなことを考えてきた方たちの中からそういう人が出てきて、託せる人がいたら、徳島にとってはものすごく幸せなことだと私は思います。

すいません。転勤族の私が言えるのは、こういうことになってしまいうんですけども、途中、割り込ませていただきました。

(会長)

余計なことかもしれませんが、成功例として、香川県の瀬戸内国際芸術祭に私も少し関係してたんですけど、あれはやはり福武さんというベネッセの社長さんが、経営面でしっかりしてて、それで北川フラムさんというプロデューサーがいたということが、成功の大部分を握っていると思うんですね。

ですから、そういう人が、あれは一つの芸術祭、3年に一度の芸術祭の話なんですけど、我々が今やっていることは、徳島の文化芸術全体の話なので、少し違った話かもしれませんが、やはりそう言う人が必要なのではないかと、委員はおっしゃているのではないかと。

今日は、そろそろ定刻にもなりましたし、今、言える事は皆さん仰っていただいたのではないかなと思うんですけど、よろしいでしょうか。それでは、事務局におきましては、只今、委員の皆様から頂いた意見を踏まえ最終案に向けての検討をお願いしたいと思います。